

トラサンデ氏、環境ホルモン問題に警鐘

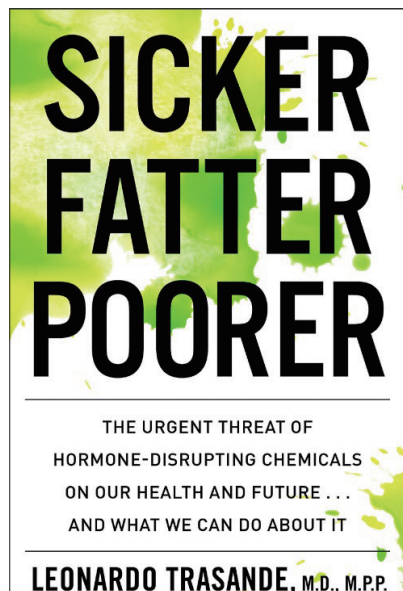
——環境ホルモンによる米国社会の損害は年間約37兆円と試算

事務局 植田武智

環境ホルモン問題を警告する *Sicker Fatter Poorer*

2019年1月に環境ホルモン問題を全米に警告した、第二の『奪われし未来』ともいわれる新著 *Sicker Fatter Poorer* (『病気が増える 肥満が増える 貧困が増える——内分泌かく乱化学物質による私たちの健康と未来への脅威に、私たちに何ができるか』) が米国で出版されました(写真1)。同書の著者であるレオナルド・トラサンデ氏(ニューヨーク大学医学部教授)が2019年1月3日に米国3大ネットワークのひとつであるCBSのニュース番組に出演しました(写真2)。トラサンデ氏が指摘するヒトと社会に影響を及ぼす環境ホルモン問題について要約してご紹介します。

写真1



生殖毒性、神経毒性、 代謝異常毒性

トラサンデ氏はまず環境ホルモンについて「ホルモンとは、私たちの体内でそれぞれの臓器や組織の間での情報伝達に使われる、体内で合成される化学物質です。『環境ホルモン』とは、体内に入るとホルモンの正常な情報伝達の働きをかく乱する人工化学物質で、それがさまざまな病気の原因となります。現在1000種類を超える化学物質に環境ホルモン作用があることがわかっています」と説明しています。

さらに、主な環境ホルモンとして、四つの化学物質を取り上げました(写真3)。一つ目は有機リン系やピレスロイド系といった農薬に使われる化学物質。二つ目は化粧品などの家庭用品や、容器包装プラスチックにも使われているフタル酸エステル。三つ目はアルミ缶の内面塗装やある種のプラスチックの原料に使われているビスフェノール A とその他のビスフェノール類。四つ目は家具やマットレス、電気製品などの難燃剤に使われているポリ臭化ジフェニルエーテル(PBDE)などの有機臭素系の化学物質です。

また同氏は、環境ホルモンによる三つの有害影響を指摘しています。

一つ目が、これまでも指摘されてきた男性の精子の減少や女性の妊娠率の低下などを起こす生殖毒性。二つ目が子どものIQの低下や、注意欠陥・多動性障害(ADHD)な

ど発達障害の原因となる神経毒性。三つ目が肥満や糖尿病などに代表される体内の代謝の異常を起こす毒性。

米国では人口の40%が肥満と診断されていて、がん(Carcinoma)を起こす化学物質を発がん物質(carcinogen)と呼ぶように、肥満(obese)を起こす化学物質を発肥満物質(obesogen)と呼んでいます。日本では米国と比べると肥満度は高くありません。しかし、糖類や脂質の代謝の異常による糖尿病や高脂血症の患者は多く見られます。また、心臓病や脳梗塞などの死に至る病気の原因にもなる代謝の異常を引き起こす環境ホルモンは日本でも大きな問題です。

キャスターからの「本当に化学物質が肥満の原因になるのか?」という質問にトラサンデ氏は、「もちろん毎日の食事や運動が、肥満に大きな影響を与えるのは当然ですが、環境ホルモンは、体内のホルモンをかく乱し、食事の栄養成分の正常な代謝を妨げ、脂肪に変換しやすくします。環境ホルモンを避けることは、食事や運動に気を付けることと同様に、肥満の防止に有効です」と答えています。

年間約37兆円もの 社会的損失

Sicker Fatter Poorer の中でトラサンデ氏は環境ホルモンが社会へ及ぼす損害について指摘しています。トラサンデ氏のチームは、動物を使っ

た毒性試験や人の観察研究である疫学調査の結果をもとに環境ホルモン物質が原因と推定される健康影響15種類（知能指数の低下や知的障害、不妊などの男性の生殖機能障害、肥満、糖尿病など）の治療のための医療費や、障害による生産性の損失などのコストを計算しました。その結果、米国では1年間にGDPの2.33%にあたる3400億ドル（約37.4兆円）のコストが、EUでは1年間にGDPの1.28%にあたる約23.8兆円のコストがかかっていると指摘しました。

さまざまな健康影響の中で米国とEU両方で一番コストが高かったのが、子どもたちの脳の発達への影響です。化学物質ばく露による知能指数（IQ）の低下と知的障害によるコストが、全体の8割以上を占めていました。

ただ原因となる化学物質は、両国で異なり、米国では有機臭素系難燃剤、EUでは有機リン系農薬でした。米国とEUの国民の体内汚染度を調べた調査では、血液中の有機臭素系難燃剤の濃度は米国の方がEUより10倍高く、逆に尿中の有機リン系農薬の量はEUの方が米国より10倍高いという結果でした。

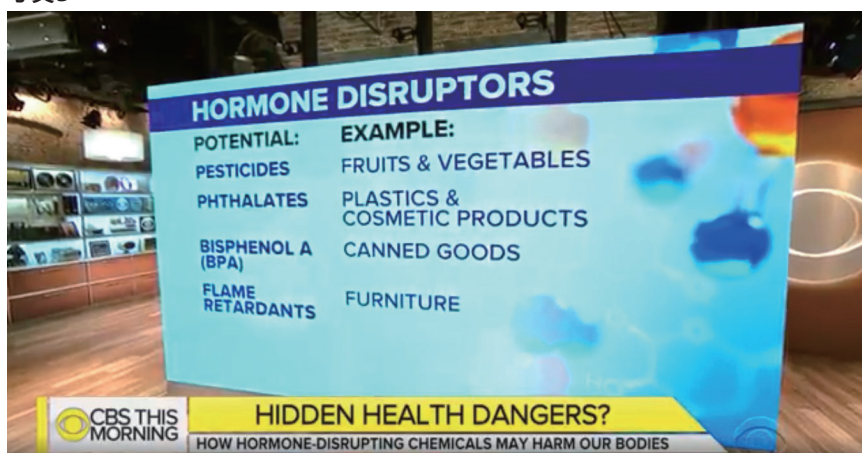
他人事ではない 日本国内のばく露

トラサンデ氏が著書内で指摘した、有機臭素系難燃剤は、家具のウレタンや、パソコンの筐体などの

写真2



写真3



プラスチック製品を燃えにくくするための難燃剤として広く使われている化学物質で、これらの家具や家庭用品から室内空気などを經由してばく露しています。一方、有機リン系農薬は現在でも多く使われているため、農薬が残留した食品を食べることによってばく露します。

有機臭素系難燃剤や有機リン系農薬は、日本でも使用されており、私たち日本人は空気や食品からばく露しています。環境省が2011年から

実施している「化学物質の人へのばく露量モニタリング調査」では、血液や尿から有機臭素系難燃剤や有機リン系農薬が続けて検出されています。

日本でも欧米の研究のように、環境ホルモンなど化学物質による健康影響のコストをぜひ計算してもらいたいものです。これらのコストは裏返せば、化学物質規制により得られる社会的利益となるからです。

2019年11月24日開催 有害化学物質から子どもを守る国際市民セミナー

来る2019年11月24日に開催の「有害化学物質から子どもを守る国際市民セミナー」にレオナルド・トラサンデ氏が登壇します。環境ホルモン問題を改めて社会に警告したトラサンデ氏のご講演にご期待ください。

またセミナーでは、『奪われし未来』の著者の一人ジョ

ン・ピーターソン・マイヤーズ氏に「日本で忘れ去られた『環境ホルモン』世界では最重要課題に」と題してご講演を、国立環境研究所の中山祥嗣氏に、近年エコチル調査などから明らかになった「子どもの発達への化学物質の影響」についてご講演いただきます。お楽しみに。

有害化学物質から子どもを守る 国際市民セミナー

ダイオキシン・環境ホルモン対策国民会議では、子どもへの有害物質の影響を減らすための政策提言と世論喚起活動を行っていますが、その一環として、国際市民セミナーを開催します。
1996年に環境ホルモン問題を初めて告発した書籍「奪われし未来」の共著者のジョン・ピーターソン・マイヤーズさんと、2019年に改めて環境ホルモン問題を告発した書籍「Sicker Fatter Poorer(病気が増える 肥満が増える 貧困が増える)」の著者であるアメリカニューヨーク大学医学部教授のレオナルド・トラサンデさんをお招きし、海外での有害化学物質による子ども・胎児への影響の研究と規制の最前線のお話をいただきます。また日本からは、10万人の子どもたちの追跡調査するエコチル調査にもかかわっておられる、国立環境研究所の中山祥嗣さんから日本の研究で分かった最新情報のお話をいただきます。同時通訳付きです。



13時05分～14時10分

Sicker Fatter Poorer 病気が増える 肥満が増える 貧困が増える

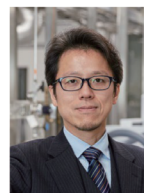
講師：レオナルド・トラサンデ氏
(ニューヨーク大学医学部教授)



14時20分～15時25分

日本で忘れ去られた「環境ホルモン」世界では最重要課題に

講師：ジョン・ピーターソン・マイヤーズ氏
(「奪われし未来」共著者、Environmental Health News 主宰)



15時30分～16時40分

子どもの発達への化学物質の影響

講師：中山祥嗣氏
(国立環境研究所 環境リスク・健康研究センター
エコチル調査コアセンター次長兼曝露動態研究室長)

日時 2019年11月24日(日)
13時00分～17時00分(12時半開場)

定員 100名 資料代 1000円

参加ご希望の方は、ファクス(03-5875-5411)か、メール(kokumin-kaigi@syd.odn.ne.jp)でお申し込みください。予約なしでの当日参加は、定員を超えた場合お断りする場合があります。

地球環境基金の助成を受けて開催されます。

会場 中央大学駿河台記念館
285会議室
(東京都千代田区神田駿河台3-11-5)

お問い合わせ お申込み
NPO法人ダイオキシン・環境ホルモン対策国民会議
〒136-0071 東京都江東区亀戸7-10-1 2ビル4階
Tel.03-5875-5410 Fax.03-5875-5411
Homepage: www.kokumin-kaigi.org
Email: kokumin-kaigi@syd.odn.ne.jp